

札幌でめぐる酪農の歴史 —酪農発展の礎を築いた人々

■概要

日本に近代的な欧米型の大規模酪農が導入されたのは明治時代初期。日本政府は、その範を米国に求めました。さまざまな技術がお雇い外国人から伝えられ、特に北海道は、広大な土地、風土に合わせて米国型酪農が展望されました。その普及の中心となったのが当時の札幌です。札幌で芽生えた酪農の試みは、民間人でも欧米に留学するなど本格的に酪農を学ぶ先駆者たちへ繋がれていきます。彼らは自ら牧場を経営して技術を磨き、力を結集して危機を乗り越え、酪農王国北海道の基礎を築き上げました。その発展の軌跡は、今も札幌のまにに残っています。

■ストーリー

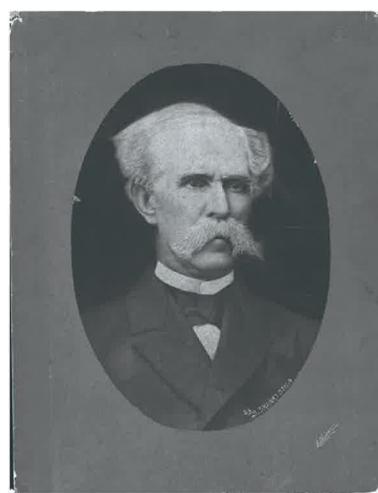
【北海道畜産の普及拠点の一つ、札幌農学校】

酪農は、牛などを飼育して乳をしぼり、牛乳やチーズなど乳製品の原料を生産する産業のこと。もともと日本にはなかった欧米型の農業です。未知の産業だった酪農は、北海道ではどのように始まったのでしょうか。

明治2年(1869年)、政府は北海道の開拓事業のため開拓使を設置しました。明治4年(1871年)、開拓使次官の黒田清隆は、米国政府農務局長だったホーレス・ケプロンを開拓使顧問として招聘。来日したケプロンは、寒冷な北海道の農業は本州のような稲作中心ではなく、家畜を取り入れた米国型の大規模な有畜農業を進めるべきであると提言します。これを受けて開拓使は、牛や羊などの家畜を輸入するとともに、技術を指導する外国人技術者を招聘しました。

また、開拓使は農業に携わる人材育成のため明治9年(1876年)に「札幌農学校(現北海道大学)」を設立します。初代教頭ウィリアム・スミス・クラークは農業の教育は実践が重要であると考えて農場を開設しました。場所は現在の北海道大学札幌キャンパス、北区北10条西6丁目付近です。

「農養園^{のうこうえん}」と呼ばれたこの農場は、1軒の大規模な畜産農家を模し、モデルバーン(模範家畜房)や穀物庫など一連の施設を備え、多数の畜力農具や外国種の牧草・家畜を導入し、北海道に酪農畜産を実践・普及する拠点となりました。



明治4年(1871年)、開拓使顧問ホーレス・ケプロン(北海道大学附属図書館所蔵)



明治4年(1871年)、開拓使顧問ケプロンとお雇い外国人たち(北海道大学附属図書館所蔵)



明治32年(1899年)頃、札幌農学校、モデルバーン前の洋牛と家鴨(アヒル)の群(北海道大学附属図書館所蔵)

【酪農の普及に努めたお雇い外国人、エドウィン・ダン】

開拓使に招かれた外国人技術者の一人で、北海道酪農の普及に大きな功績を残した人物がエドウィン・ダンです。オハイオ州の牧場出身で酪農畜産の仕事に熟知していたダンは、明治6年(1873年)から東京の第三官園(官園は開拓使が設置した農業に関する試験・普及機関)で畜産技術の指導にあたりました。

明治9年(1876年)に札幌官園に赴任し、「開拓使真駒内牧牛場」を建設。約100ヘクタールの広大な土地で牧草を育て、牛や豚、羊を飼育し、バターやチーズ、練乳、ハム、ソーセージの試作を行い、酪農畜産の模範を示しました。また、札幌農学校の教師を兼務して学生の指導にあたりました。

その功績は多岐にわたりますが、家畜の輸入にはじまり、真駒内牧牛場と新冠牧馬場の創設、牧場の設計・運営、乳製品や食肉加工・製造の指導、獣医学や解剖学の実践・普及などがあげられます。



明治6年(1873年)頃、来日当時のエドウィン・ダン
(北海道大学附属図書館所蔵)



明治10年(1877年)頃 真駒内牧牛場でプラウ(すき)をひく牛
(北海道大学附属図書館所蔵)

【ダンの教えを受け継ぐ弟子により、酪農が開花】

札幌農学校の第2期生・町村金彌^{きんや}は農学校卒業後に真駒内牧牛場に勤め、直接ダンから酪農を学んだ一番弟子といえる人物です。ダンの教えは町村によって、雨竜華族組合農場や十勝開墾合資会社農場などに生かされ、北海道内に米国式酪農が広がっていきました。

その町村から教えを受けたのが、明治18年(1885年)に札幌に来た宇都宮仙太郎です。宇都宮は大分県に生まれ16歳で上京、自分の将来を考えていたとき牛乳搾取業者(牛を飼って牛乳を販売する業者)に興味をもち、北海道行きを決意します。札幌に入るとすぐ真駒内牧牛場に向かい、場長だった町村に雇われて仕事を始め、さらに本格的な技術と知識を身につけるため明治20年(1887年)から3年間米国へ渡り、ウィスコンシン州立農科大学などで学びました。

帰国後は町村のもと雨竜華族組合農場に勤め、26歳で独立し、札幌で牛乳搾取業を開始します。最初は現在の北海道知事公館付近で牛3頭を飼って牛乳を販売し、民間人として初めてバターも製造、当時札幌でいち早く洋食を提供していた豊平館にも納入しました。

その後、宇都宮は東京で牧場経営を行いますが、明治31年(1898年)に札幌へ戻り大通9丁目付近で牧場を再開します。明治35年(1902年)には上白石(現在の白石区菊水1~3条3~5丁目付近)へ移転し、約20ヘクタールの原野に米国式の牛舎を建設して多い時は80頭以上の牛を飼い、近代的な酪農を開花させました。



町村金彌
出典『町村金五伝』(北海タイムス社編 昭和19年(1944年)以前撮影)



宇都宮仙太郎（雪印メグミルク所蔵）



上白石の宇都宮牧場（北海道大学附属図書館所蔵）

【関東大震災後、酪農家を救ったバター製造】

明治28年(1895年)頃、宇都宮は10数名の仲間と北海道初の民間酪農団体「札幌牛乳搾取業組合」(のちのサツラク農協・雪印乳業の母体)を結成、組合長として酪農技術の普及に努めました。また、この組織が中心となって家族経営を基本とし、冷害に強いデンマークの農業を北海道に紹介しました。

大正4年(1915年)、札幌牛乳搾取業組合の中心メンバーが「札幌牛乳販売組合」を設立し、宇都宮は組合長となります。組合では酪農家が余った乳を練乳会社に出荷する際の適正な乳価の協定交渉、飼料の共同購入などを行いました。

大正12年(1923年)に関東大震災が発生すると、救援物資の増加などで輸入練乳が国内にあふれ、練乳会社が原料の仕入れを控えたため、零細経営の酪農家が窮地に陥ります。宇都宮は大正14年(1925年)、のちに北海道酪農義塾(酪農学園大学の前身)を創設する黒澤西蔵、佐藤善七らとともに、デンマーク式の共同組合を参考に「北海道製酪販売組合」(雪印メグミルクの前身)を設立。バターの自主製造・販売を開始し、酪農家を救う一大事業を達成しました。

この時バターの製造は佐藤善七の長男で、のちに雪印乳業初代社長となる佐藤貢が、販売は黒澤西蔵があたりました。



設立当時の北海道製酪販売組合（雪印メグミルク所蔵）



北海道製酪販売組合が販売した「雪印北海道バター」と雪印マーク（雪印メグミルク所蔵）

【酪農の歴史を感じてみよう】

北海道酪農の普及拠点であり、発展を支えてきた札幌のまちは今も各所で酪農の歴史文化を感じることができます。

クラークが開設した「農黌園」は「札幌農学校第二農場」と改称し、明治42年(1909年)から大正元年(1912年)の移転・新築工事を経て昭和43年(1968年)まで北海道大学附属農場として教育研究が行われていました。現在は国の重要文化財として保存・公開され、都心部にありながら明治初期の酪農を実感できる貴重な場所となっています。

少し郊外へ足を伸ばしてみるのもおすすめです。南区真駒内にある「エドウィン・ダン記念館」は、明治13年(1880年)に開拓使真駒内牧牛場の事務所として建てられ、昭和39年(1964年)に現在の場所に移築、ダンの功績をしのぶ記念館として公開されています。



札幌農学校第二農場

また、厚別区のひばりが丘団地のシンボルとして保存されている大きなサイロは、昭和2年(1927年)に設立した「旧馬場農場」のもので、当時の札幌とその近郊に建てられたサイロでは、最大級のひとつでした。

厚別区上野幌の雪印種苗園芸センター内にある「旧出納邸」は、宇都宮仙太郎の娘婿で宇納牧場を経営した出納陽一の自邸で、腰折屋根(ギャンブレル屋根)が特徴的です。敷地内には「雪印バター誕生の記念館」や「旧宇納牧場」のサイロも保存されています(これらの三施設は現在非公開です)。また、東区苗穂町にある雪印メグミルク「酪農と乳の歴史館・札幌工場」には、バターづくりを開始した当時の道具をはじめ、北海道酪農の歴史を語る史料を展示しています。

歴史を感じつつ現代の酪農の魅力を実感できる場所といえば、昭和5年(1930年)に開校した豊平区月寒の「八紘学園」があります。園内の直売所では学生が実習で生産した新鮮な乳製品を購入できます。

ほかにも札幌市内には酪農に関連した場所や施設が数多くあります。実際に見たり触れたり、味わったりしながら、先人たちが築いた酪農の歴史に思いを馳せてはいかがでしょうか。



旧馬場農場のサイロ



旧出納邸